様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ９ 月　 ９ 日現在

機関番号：３３９４３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０４３２２

研究課題名（和文）養育者の情動認知発達プログラムの開発－子どもの発達特徴との関連と臨床的応用－

研究課題名（英文）emotional

研究代表者
小原　倫子（TOMOKO, OBARA）

岡崎女子大学・子ども教育学部・教授

研究者番号：１０４５００３２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究の目的は、幼児期前期（1歳～3歳）の子どもを持つ養育者の情動認知と子どもの発達特徴の関連について、日常的文脈の観点から検証とモデル化を行い、養育者の情動認知発達プログラムを開発することである。研究成果として養育者の情動認知が測定可能な幼児期前期の子どものビデオ刺激を開発し、妥当性を検証した。このビデオ刺激を用いて養育者の情動認知と子どもの発達特徴との関連を検証したところ発達障がいと診断された子どもの養育者は、情動認知の際に使用する手がかりが、客観的な文脈から養育者の主観的表象へ移行する傾向が少ないことが示された。これらの結果を応用したトレーニングプログラムを現在検証中である

研究成果の学術的意義や社会的意義
幼児期前期（1歳～3歳）の子どもを持つ養育者の情動認知と子どもの発達特徴の関連について、日常的文脈の観点から検証とモデル化を行い、養育者の情動認知発達プログラムを開発するという本研究の目的を検証することは、安定した養育者‐子ども関係のための重要な知見となる。また、養育者の情動認知が子どもの発達特徴とどのように関連するのかという視点からも学術的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：For development of an emotional cognitive caregiver development program, we investigated mothers with children in the early childhood years (age 1-3 years) to verify and model the relationship between emotional state and recognition of child developmental characteristics in a daily context. As part of this research, a video stimulus of early childhood behavior for measuring the emotional recognition of mothers was established and its validity verified, which was then used to examine the relationship between emotional recognition by caregivers and the developmental characteristics of children. The results showed that mothers of children diagnosed with developmental disabilities found cues for emotional cognition in objective contexts, while there was only a slight tendency to shift from the objective context to subjective representation of the caregiver. A training program with application of these results is currently under development.

研究分野：発達心理学　教育心理学　臨床心理学

キーワード：親子関係　社会的情動発達　情動認知　応答行動　日常的文脈

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

従来の母親の心理的発達における知見は、母親になることによる主観的意識や自己概念の変化、育児に対する態度や意味づけの変化を明らかにしている（柏木&若松,1994；徳田,2004）。これらの研究は、生涯発達的視点から、母親の主観的意識としての態度や意味づけの変化に焦点があてられており、子どもとの相互交渉の中で生起される母親の変化そのものの検証は十分ではない。Emde&Sorce(1988)は、特定の情動に関する明確な仕種がない新生児に対しても、日常的文脈を基にして乳児の情動を読み取る母親の応答性は、母子の共感的過程に貢献すると述べている。母親が子どもとの相互作用の中で子どもの情動をどう認知し、どのように解釈するかという認知的能力は、その後の子どもへの応答行動に大きな影響を及ぼすことが予想される。しかしながら、これまでに日常的文脈における母親の情動認知と応答行動の発達に関する研究はほとんど見られない。発達初期の不確かな情動表出を示す乳児の情動を、母親がどう認知し、その後の応答行動をどのように行っていくかについて明らかにすることは、安定した母子関係のための重要な要因である。また、母親の応答行動が、子どもの発達に影響を及ぼす（Hsu&Fogel）という報告がある。子どもの発達への影響という視点からも、母親の情動認知と応答行動の発達プロセスの検証は必要である。小原（2005a, 小原,2005b, 小原 2006）によれば、母親による子どもの情動認知と応答行動の特徴は次のようである。①養育体験を重ねることにより、ネガティブな情動を含むより幅広い情動認知へと発達する。②母親の情動認知の幅広さと養育行動の繊細さは関連している。このような結果から、母親の情動認知と応答行動は、関連しながら母子相互作用という日常的文脈の中で変化していくことが予想される。しかしながら、これらの調査では、乳幼児の写真刺激を用いて母親の情動認知の把握を行っている。日常の相互交渉場面に即した調査による検証が必要である。また、発達的変化が著しい乳児から幼児期にかけて、母親の情動認知と応答行動がどのように変化し、関連しているのかについても明らかになっていない。更に虐待や発達障害等といった異なる養育環境や発達程度の差異による母親の情動認知と応答行動の発達パターンの違いについてはほとんど明らかになっていない。以上の課題について妥当性のある調査方法の開発も含め体系的な調査計画に基づく、厳密な検証が必要であると考える。

２．研究の目的

本研究の目的は、申請者らが明らかにした 0 歳児を持つ養育者による“子どもの情動状態を読み取る能力”のメカニズム及び発達プロセスと、それらのモデルを臨床的に応用した、養育者の適応的な子どもへの関わり方を体験的にトレーニングできる情動認知発達プログラムを基盤にして、幼児期前期（1 歳～3 歳）の子どもを持つ養育者の“子どもの情動状態を読み取る能力”のメカニズム及び発達プロセスを検証する。更に、幼児期前期（1 歳～3 歳）に顕在化しやすい“子どもの発達特徴”との関連について比較検証を行う。

３．研究の方法

【研究項目(1)】養育者による子どもの情動認知を測定することが可能な、統制され、かつ日常的文脈に根ざした測定ツール（0 歳児，1 歳児，2 歳児，3 歳児の VTR 刺激）の開発。

協力者：子育て中の母親 127 名（3 ヶ月：29 名、6 ヶ月：25 名、9 ヶ月：34 名、12 ヶ月：39 名）

ビデオクリップの作成：25 名（0 歳児：5 名　1 歳児：8 名　2 歳児：6 名　3 歳児：6 名）の乳幼児の自由遊び場面を 1 人 30 分程度録画した。その際、養育者は子どもの情動を読み取る際には子どもの表情だけでなく周囲の文脈情報も手掛かりとして多く利用していることなどから以下の点に留意して撮影を行った。

①表情に限定せず，乳児の全身および周囲の状況を含んだ場面を撮影すること。

②できるだけ、日常的文脈に根差した自然な遊び場面であること。

録画された乳幼児の表情、行動、発語から、情動がポジティブ、ネガティブ、ニュートラルと考えられる場面を各年齢（0 歳、1 歳、2 歳、3 歳）で切り取った 30 秒のビデオクリップを作成した。作成したビデオクリップの数は以下の通りである。

◎0 歳児の情動場面のビデオクリップ：35 クリップ
ポジティブな情動場面 12
ネガティブな情動場面 12
ニュートラルな情動場面 11
◎1 歳児の情動場面のビデオクリップ：51 クリップ
ポジティブな情動場面 19
ネガティブな情動場面 13
ニュートラルな情動場面 18
◎2 歳児の情動場面のビデオクリップ：38 クリップ
ポジティブな情動場面 19
ネガティブな情動場面 10

ニュートラルな情動場面 9
◎3 歳児の情動場面のビデオクリップ：32 クリップ
ポジティブな情動場面 18
ネガティブな情動場面 5
ニュートラルな情動場面 9
　これら全てのビデオクリップに対して、評定者 2 名が（快⇔不快）（覚醒：高⇔覚醒：低）の 2 軸で情動の内容について評定を行い、各年齢で、一致率の高いビデオクリップを 30 クリップずつ、計 120 クリップを選定した。選定基準として Emde　et al(1994）による Dimensional Code Sheet を報告者が翻訳したものを使用した。
　選定された 120 クリップの VTR 刺激の妥当性を検証するために、ビデオクリップと同じ年齢の乳幼児を持つ養育者 126 名（0 歳児：26 名　1 歳児：39 名　2 歳児：28 名　3 歳児：33 名）に自分の子どもと同じ年齢の子どものビデオクリップの評価と半構造化面接及び質問紙調査を依頼した。その結果、収束的妥当性と弁別的妥当性の観点から、各年齢 6 つのビデオクリップが VTR 刺激として妥当であることが示された。

【研究項目(2)】半構造化面接の内容分析に基づき、養育者による子どもの情動認知のメカニズムを検証するための、情動認知カテゴリーと情動を認知する際に利用する手がかりカテゴリーの作成。
◎半構造化面接の内容は
①（乳児の情緒を尋ねる質問）「赤ちゃんはどのような感情状態だと思われますか？」
②（情緒の読み取りに母親が用いる手がかりを尋ねる質問）「そのような感情状態と思われたのは，どのようなところからですか」
　質問①②の回答を，KJ 法により，評定者 2 名で合意が得られるまで類型化を行い 28 個の情動カテゴリーと 7 個の情動認知の際に利用する手がかりカテゴリーが得られた。

【研究項目(3)】健常群とリスク群の養育者による子どもの情動認知の発達プロセスの特徴の差異を明らかにするために、新しく開発したビデオ刺激と情動カテゴリー及び情動認知の際に利用する手がかりカテゴリーを用いてそれぞれの群の発達プロセスについて比較検証を実施した。また、対児感情尺度と多次元共感性尺度を用いた質問紙調査を依頼した。
半構造化面接
協力者：2 歳児を子育て中の養育者（発達が気になる子どもの養育者群、健常な子どもの養育者群）各 20 名
手続き：2 歳児を子育て中の養育者（発達が気になる子どもの養育者群、健常な子どもの養育者群）各 20 名を対象に、妥当性が検証された 2 歳児のビデオ刺激（30 秒）、6 クリップ（ポジティブ 2、ネガティブ 2、ニュートラル 2）を提示し、以下の項目についてインタビューを半年間隔で 2 回実施した。
①（乳児の情緒を尋ねる質問）「赤ちゃんはどのような感情状態だと思われますか？」
②（情緒の読み取りに母親が用いる手がかりを尋ねる質問）「そのような感情状態と思われたのはどのようなところからですか」
　その結果、発達が気になる子どもの養育者群は、健常群と比較すると、読み取る子どもの情動の種類が少なく、子どもの情動状態を読み取る際の手がかりが、客観的な文脈から養育者の主観的表象へと移行する傾向が少ないことが示された。
　現在、0 歳児、1 歳児、4 歳児を子育て中の養育者を対象に研究項目(3)の調査を継続中である。これらの調査結果を分析し、乳児期から幼児期前期までの養育者による子どもの情動認知の発達プロセスを検証し、更に“ 子どもの発達特徴 ”との関連について比較検証を行う予定である。

４．研究成果
【研究項目(1)】母親の情動認知を測定するためのツールとして、乳児期から幼児期前期（0 歳～3 歳）の様々な日常生活場面を素材とした VTR 刺激を作成し、測定ツールとしての信頼性および妥当性を検証した。また、その過程を論文として公刊した。

【研究項目(2)】VTR 刺激を用いて、乳児期から幼児期（0 歳～3 歳）の子どもを持つ養育者の情動認知カテゴリーと情動を認知する際に利用する手がかりカテゴリーを作成した。これらのカテゴリーの内容から、養育者は、乳児の表情や行動、発声といった子どもに焦点化された情報だけでなく、遊んでいる対象や養育者の内的表象（育児態度や育児信念）も利用して情動を認知している可能性が示唆された。この過程については国内外の学会で発表を行い加筆修正した内容での論文を準備中である。

【研究項目(3)】2 歳児を子育て中の養育者を対象にした調査結果から、発達が気になる子どもの養育者群は、健常な子どもの養育者群と比較すると、読み取る子どもの情動の種類が少なく、子どもの情動状態を読み取る際に利用する手がかりが、客観的な文脈から養育者の主観的表象へと移行する傾向が少ないことが示された。現在、0 歳児、1 歳児、4 歳児を子育て中の養育者を対

象に研究項目(3)の調査を継続中である。これらの調査結果を総合的に分析し、乳児期から幼児期前期までの養育者による子どもの情動認知の発達プロセスを検証する予定である。更に“子どもの発達特徴”との関連についても比較検証を行う予定である。この過程については国内外の学会で発表を行う予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小原倫子	４．巻 51
２．論文標題 乳幼児の情動状態を読み取るVTR刺激の妥当性の検証(1)	５．発行年 2018年
３．雑誌名 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学紀要	６．最初と最後の頁 9-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　3件）

１．発表者名 小原倫子　石井僚
２．発表標題 乳幼児の心的状態の読み取りを測定するVTR刺激の開発とだ要請の検討
３．学会等名 日本発達心理学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 小原倫子　石井僚
２．発表標題 Development of video stimulus method for determining cognition of infant mental state and examination of its validity.
３．学会等名 The 18th European Conference on Developmental Psychology Utrecht University Utrecht Netherlands.（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 石井僚　小原倫子
２．発表標題 Relationship between Emotional Intelligence and Perception, and Sense of Difficulty with Child-Rearing in Mothers of Newborns.
３．学会等名 The 18th European Conference on Developmental Psychology Utrecht University Utrecht Netherlands.（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 小原倫子　石井僚
２．発表標題 Association of infant developmental characteristics and ability of their mother to perceive emotional state Investigation with newly developed VTR stimuli.
３．学会等名 The 19th European Conference on Developmental Psychology Divani Caravel Athens Greece.（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計1件

１．著者名 氏家達夫（監修），島義弘，西野泰代，小原倫子，小山里織，丸山宏樹，丸山笑里佳，中山留美子，長谷川有香，小林佐知子，森山雅子	４．発行年 2018年
２．出版社 北大路書房	５．総ページ数 260
３．書名 個と関係性の発達心理学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	小山　里織 (KOYAMA SAORI) (40458089)	県立広島大学・公私立大学の部局等（三原キャンパス）・准教授 (25406)	
研究分担者	岸本　美紀 (KISHIMOTO MIKI) (20461915)	岡崎女子大学・子ども教育学部・講師 (33943)	
研究分担者	石井　僚 (Ryo Ishii) (50804572)	同志社大学・研究開発推進機構・特別研究員 (34310)	